

厳島図絵に見る名所と景観価値 ～文化的景観の継承と観光資源への展開～

広島県庁 学生会員 ○木下 諒
 広島工業大学 正会員 今川 朱美

1 はじめに

「芸州厳島図絵」※¹⁾ は、文化的に成熟した江戸時代後期に描かれた名所図絵である。290 枚の風景画・挿絵のうち 133 枚が名所の絵でありいずれも秀逸である。それらには、具体的な景色や寺社などが写實的に描かれており、四季を通じて江戸庶民の情緒を風景に盛り込み、さらに、ランドスケープ構成要素を詳細に表現した図会であり、唯一のマスメディアとして中心的役割を果たした浮世絵版画である。それらについて、景観要素をデータ化し、空間構成と機能構成について分析を行う。その結果より宮島の名所の景観的特性と特徴を明らかにすることを目的とする。

2 名所図会の要素把握・季節分類

特徴的な要素として挙げられるのは、神社仏閣を主対象とした図絵の割合は全体の約 50%にも及んだ。名所の半数近くが神社仏閣を主対象としていることから、神社仏閣は主要な名所であったと考えられる。現在より信仰深い時代だったと考えられ、時代背景も関係した結果ではないかと推測している。

また、描かれた名所の四季を区分した。季節の判断には花や、動物、名所図会の説明文に記載されている暦から確認を行った。特定することができた名所は、133 枚中 67 枚で、全図絵の中の 60%が季節の景物を備えていた。67 枚のうち春と秋が半数をしめており、春、もしくは秋に宮島の名所をより楽しめるということが明らかになった。(図 1)



図 1 芸州厳島図会季節図絵数 (n=67)

挿絵に描かれた名所の位置を特定し、地図上にプロットすることで、名所位置の分布を把握し、四季ごとの分布の様子を示したものが図 2 である。描かれた枚数の多い春と秋の分布が山辺に多く分布することがわかる。

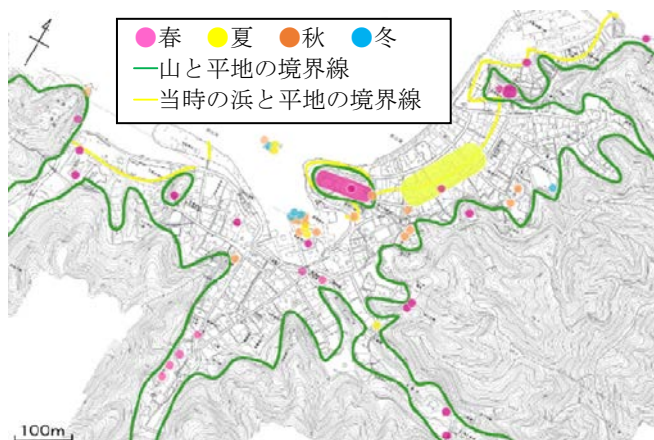


図 2 名所の四季別視対象分布図

3 地形による景観特性

ベース地図から等高線などを用いて名所位置の地形を確認した。(図 3) (図 4) これより、水辺と山辺に名所が集中していることが分かった。54 枚中、山辺 26 枚 (約 48%) 水辺 21 枚 (約 39%) で、山辺の方が少し優勢であった。さらに、宮島の地形から谷と岬が確認でき、谷は 17 枚 (約 25%)、岬は 6 枚 (約 11%) であった。

この山辺空間のうち「谷」という地形は、左右から山が迫り、隠れこもった場所として「庇護性」に長けている。また、かつては海辺空間であった「岬」は平地や海に向かって山の先が突き出た地形をしており、その上からは広い視界を確保できる場合が多い。そして平地より高い位置にあり、俯瞰で景色を眺めることができ「眺望性」が高いとされている※²⁾。



図 3 庇護性の高い「龍の宮」



図 4 眺望性の高い「経尾」

厳島図絵では、庇護性と眺望性を活かす機能を有した名所「要害の鼻」、「白糸の瀧」が確認できた。(図 5)

庇護性の高い谷に確認できた名所には庭園や寺院を含む建造物が多く確認できる。これは、庇護性のある

キーワード 芸州厳島図絵, 文化的景観, 対象場 (視対象)

連絡先 〒731-5193 広島市佐伯区三宅 2-1-1 E-mail : a.imagawa.vf@it-hiroshima.ac.jp

場所で隠れながらにして楽しむことのできる場が四季を通じて好まれていることがわかる。一方、眺望性の高い岬の名所には、桜の名所が多いことから花見を楽しむのに適した場所であることがわかった。なお、岬は埋め立てにより、現在は街もしくは山辺空間となっている。

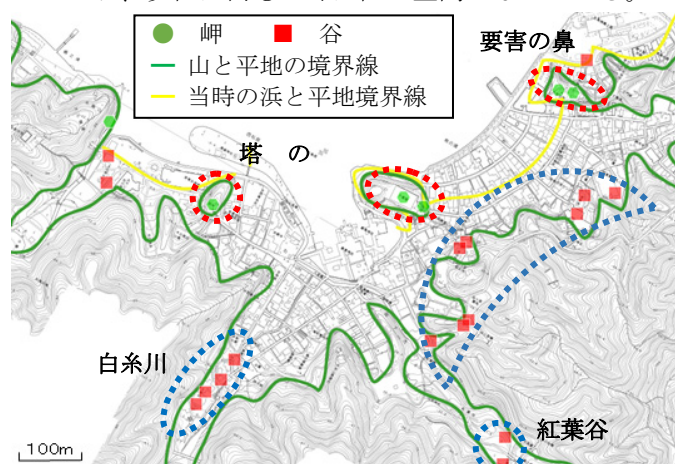


図5 岬・谷の地形分類

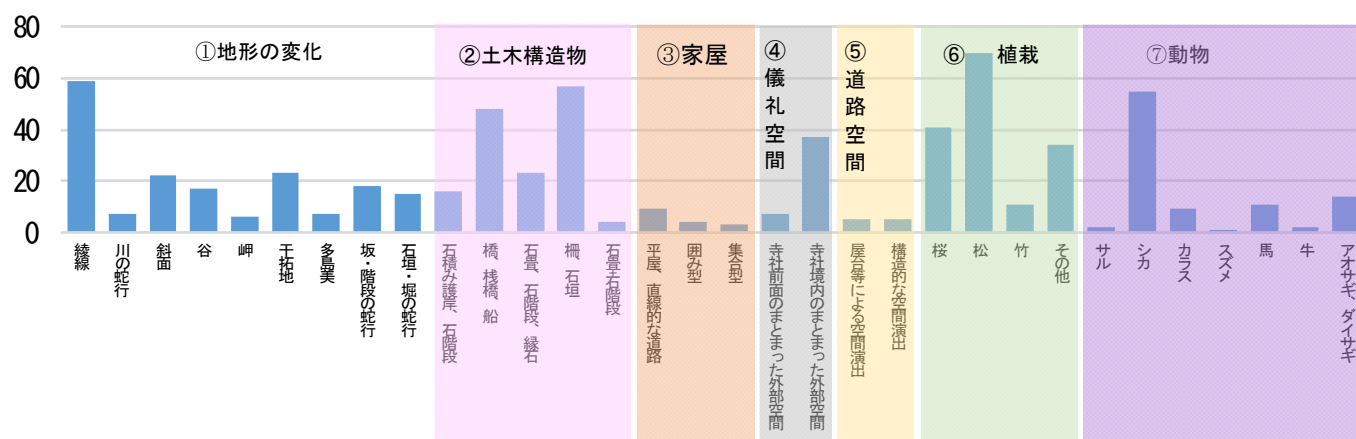


図6 景観構成要素による特性分類

5 結論

本研究で見出した宮島の名所景観の特徴としては、①神社仏閣の名所が多く、宮島景観の主軸となっている。②春と秋の名所が充実している。③山辺空間では谷に、海辺空間では岬に名所が多く認められ、その地形を活かし、活かされる機能を有した名所となっている。起伏にとんだ地形の生み出す魅力が宮島の景観を形成していることが明らかになった。

宮島の景観特性を形成するのは、山辺と海辺の空間である。山辺の「谷」は庇護性に優れ、神社仏閣などが多く厳かな祭礼空間であると同時に、四季を楽しめる要素を備えた場所となっている。一方海辺の「岬」は眺望性に優れており、花見などにより活気あるにぎやかな雰囲気があり眺望空間を形成している。これらの宮島の名所景観の特性は、現在も色濃く継承されて

4 景観構成要素による景観特性

名所の図絵を構成する景観要素により分類したところ7つの特性が明らかになった。(図6)

さらに細分化すると、地形の変化を、線的・面的・立体的要素として捉えると、地形の切り替わる境界ラインに名所が多いことがわかる。地形的特性を捉えたものも多いが、自然現象として珍しい蜃気楼や厳島神社の潮の満ち引きも注視され表現されていた。

表現された空間を見ると、宗教空間や祭礼空間だけでなくランドマークとなりえる工作物が強調されている。寺社前面や境内での日常的活動を表現したものは観光化をアピールする風景画だとも考えられる。描かれた樹木種、たまり場、通り景観の表現、周縁部境界の表現等も宮島の景観特性を図会に描くことで広く紹介していることがわかる。

おり、厳島図絵により観光化への狙いも見事に受け継がれている。したがって厳島図絵の名所は観光資源として活かされていることが明らかになった。

註

- 1) 厳島神社を中心とする厳島（広島県宮島町）の名所図会。芸州浅野家に仕える岡田清の編著で「厳島図会」5巻と「厳島宝物図会」5巻の全10冊から成り、最終巻は天保《てんぽう》13年（1842）に出版された。
- 2) 参考文献3『日本の景観 - ふるさとの原型 - 』の中で書かれている地理学者ジェイ・アップルトン氏の考え方をより、庇護性と眺望性という性質を見出した。

参考文献

- 1) 岡田清 編・山野峻峯斎 画「厳島図絵」巻之1-10、中島本町 世並屋伊兵衛、1842
- 2) 宮島町「宮島町史 資料編」凸版印刷（株）、1991
- 3) 樋口忠彦「日本の景観 - ふるさとの原型 - 」1993
- 4) 駒井達也・森保洋之「宮島門前町東町の街区形成過程と敷地割に関する一考察」日本建築学会技術報告集19-14、2013